様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　５ 月 ２７ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ０１０４７

研究課題名（和文）環太平洋地域マイノリティ史から問い直すアメリカ史

研究課題名（英文）Reconsidering American History through Transpacific Minorities' Perspectives

研究代表者
兼子　歩（Kaneko, Ayumu）

明治大学・政治経済学部・専任講師

研究者番号：８０４６４６９２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：この研究プロジェクトは、アメリカ合衆国のアジア系マイノリティ史を再検討するために、アメリカをはじめとした環太平洋世界を対象とし、太平洋を多様な地域のあいだの交錯を可能とする重層的空間であると捉え直した上で、アメリカと東アジア・東南アジアにまたがる環太平洋世界の構造がいかにアメリカ合衆国におけるマイノリティーズの歴史的経験と、またマイノリティーズとの関係において再編されるアメリカ主流社会そのもののあり方を規定してきたのかを明らかにした。アメリカのアジア系マイノリティの経験・アイデンティティとそのアメリカ社会へのインパクトが、環太平洋世界を規定してきた帝国的秩序と不可分であることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
この研究は、アメリカのアジア系マイノリティの歴史的経験やアイデンティティやアメリカ社会認識が、合衆国社会だけでなく、アジアからアメリカへの人の移動という経験と、その移動を規定してきた日本の朝鮮植民地化、アメリカの支配下に入るハワイ、冷戦下でのアメリカのアジアへの軍事介入など、太平洋世界の歴史的構造そのものによっても形成されてきたことを明らかにした。このことは、アジア系のいまを理解するために、合衆国とアジア諸国・諸地域のあいだの歴史的な関係、とくに軍事的・植民地的関係から理解することが不可欠であることを確認させてくれる。

研究成果の概要（英文）：　This research project has reappraised American history of Asian minorities through the lens of trans-Pacific perspective in which we conceptualized the Aisa-Pacific world as a historically multilayered structure of intersections between various Pacific-rim regions and in which we analyzed how the trans-Pacific power structures of Americas, East Asia, and Southeast Asia has shaped American minorities' historical experiences and their impacts on the mainstream American society.
We have uncovered in this project how Asian American minorities' experiences and identities and their influence on the American society has been determined by the history of Asia-Pacific world which has been shaped by cooperations, exchanges, and conflicts among Pacific empires such as the United States and the Japanese Empire.

研究分野：アメリカ史

キーワード：マイノリティ　アメリカ合衆国　日本　朝鮮　環太平洋世界　ディアスポラ　セクシュアリティ　国勢調査

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

従来の日本およびアメリカ合衆国のアメリカ社会史研究におけるマイノリティ史、とくにアジア系アメリカ人の歴史的研究が、アメリカ史という一国史の枠組みに閉じた研究になりがちであるという状況があった。アジア系アメリカ人を、アメリカ社会のサブカテゴリーとしてのみ理解し、アジア系アメリカ人集団について、あるいはアジア系アメリカ人集団とアメリカ主流社会の関係に分析が集中してきた。

しかしながら、アジア系アメリカ人の歴史的経験は、アメリカ合衆国という枠組みの中に閉じては理解できない要素を有している。アジア系はアジア地域出身者およびその子孫であるという点で、アジアにルーツを有しているというだけでなく、とくに 1965 年移民法によってアジアからアメリカ合衆国への移民が大幅に緩和された結果、その後のアジア人移民の数は急増しており、そのために、2018 年にはアジア系はアメリカ人口の 5.4%に達した。2019 年のアメリカ在住非米国籍者の 3 割がアジア系である（United States Census Bureau）。

このことは、アメリカのアジア系は、常にアメリカ生まれで第二世代以降のアジア系アメリカ人と、アジア諸国から到着したアジア人移民とが、ともにアジア系マイノリティを形成しており、この点でもアジア系アメリカ人を理解するためにはアメリカ合衆国だけではなくアジア地域との関係を考察する必要があり、アジア系アメリカ人の歴史的経験がアメリカとアジアの双方によって規定されてきたことを意味する。それはさらに、アジアとアメリカをとりまく環太平洋世界の構造がアジア系アメリカ人の歴史的経験を形成してきたこと、その積み重ねの上に現在のアジア系アメリカ社会が成立していることを意味している。

そして、そのことは、アジア系アメリカを環太平洋世界という枠組みから捉え直すことは、同時に、アジア系アメリカ研究を通じて、環太平洋的な視点からのアメリカ合衆国史そのものの捉え直しを促すことでもある。

これらの点への理解を深める必要性の認識が、本研究プロジェクトを発足させた背景である。

２．研究の目的

本研究は、アジア系アメリカを環太平洋世界という枠組みから捉え直すことを通じて、アメリカ史叙述そのものを再解釈する可能性を模索するために、以下のように目的を設定した。

すなわち、これまで隔離的に研究される傾向のあった、マイノリティをめぐる３つの争点（人種・エスニシティ、移民・難民、ジェンダー・セクシュアリティ）を通じて、アメリカ合衆国史全体の叙述に批判的に介入し、総合的・包括的なアメリカ史研究の可能性を探ることを目的とする。その可能性を追求するために、本研究は①一国史的な米マイノリティ史研究に環太平洋的視点を導入することにより、②マイノリティ史を本質的要素としてアメリカ史そのものの研究に組み込むことを通じて、既存のアメリカ史叙述の枠組みを相対化し、新たなアメリカ史叙述の方法を確立することを目指す。

３．研究の方法

本研究プロジェクトでは、アジア系アメリカ人史研究に対して、①人種・エスニシティ、②移民・難民、③ジェンダー・セクシュアリティという３つの争点からアプローチするという方法をとった。プロジェクトのメンバーは、①～③のアプローチのいずれかを採用し、そのアプローチにもっとも適合するテーマを選んだ。メンバーのうち、兼子は 1970 年代以降のアジア系アメリカ人クィア活動家の組織活動に焦点を当てた。菅は 19 世紀後半以降のアメリカ合衆国国勢調査（センサス）の原票に現れる日本人および他人種との異性愛的親密性（インティマシー）の調査のされ方に着目した。李はアメリカ（ハワイ・グアム）および日本におけるコリアン・ディアスポラの歴史的経験に着目した。佐原はベトナム戦争後にアメリカに再定住したインドシナ難民のオーラル・ヒストリーに現れる、冷戦期アメリカとそのベトナムへの軍事介入の歴史に焦点を当てた。

各メンバーは、それぞれのテーマを検討するために、アメリカ合衆国本土およびグアム等で各種の一次史料を収集し、これを分析した。史料分析において重視されたのは、アメリカにおけるアジア系の一次史料を、アメリカ合衆国史の枠組みの内部でのみ解釈せず、かれらの経験のなかにどのように環太平洋世界の構造のインパクトが織り込まれていたのかを発掘していくという方法であった。

また、このプロジェクトには外部の研究者の協力を得て、代表者・分担者のみではカバーしえない争点に関する知見を提供していただき、アジア系アメリカ人史と環太平洋世界の関係がアメリカ史叙述そのものにいかなる関係をもちうるのかを検討する上で多くの洞察を得ることを目指した。そのために、勉強会に講師を招き、また小シンポジウムおよび国際シンポジウムを開催して国内外より研究者を招聘し、報告と討議を通じて分析を深めていくことを目指した。

４．研究成果

１）各人の 3 年間の研究成果

研究代表者の兼子は、1970 年代以降のアメリカ合衆国におけるアジア系アメリカ人クィア・アクティビストに注目し、かれらが結成した団体の文書を中心にサンフランシスコ公立図書館・カリフォルニア大学バークレー校バンクロフト図書館および総合図書館（定期刊行物マイクロフィルム）、南カリフォルニア大学図書館 ONE 全国ゲイ・レズビアン史料館に所蔵されている一次史料を閲覧・複写した。収集した史料には、1980 年に結成された Asian/Pacific Lesbian and Gays (A/PLG)や、1988 年に結成された Gay Asian Pacific Alliance (GAPA)の内部史料及びニューズレターが含まれる。

これらの史料を分析していく作業を進めることで、以下の可能性を見出すことができた。まず、これらのアジア系アメリカ人クィア運動組織が開催するイベントやニューズレターの誌面は、日系や中国系、韓国系、フィリピン系など、多様なアジア系エスニシティに属する人びとが、「アジア系」かつクィアであるという２つの要素を軸として共通のアイデンティティを形成し、涵養するフォーラムとして機能していたということ。かつて Yen Le Espiritu は *Asian American Panethnicity* (1992)において、アジア系諸エスニシティに属するアメリカ人が、1960～70 年代の反戦・フェミニズム運動や選挙政治への関与、ヴィンセント・チン事件（1982）のような「アジア人」に対する人種暴力への抗議を通じて、各エスニシティを超えた（パンエスニックな）「アジア系」としてのアイデンティティを獲得していった過程を論じたが、クィアだが無徴の白人ではないという、人種とジェンダー／セクシュアリティの交錯に基づいた経験もまた、パンエスニックなアジア系アメリカ人意識の形成の経路の一つになったという可能性である。

もうひとつは、A/PLG や GAPA のニューズレターの記事には、アジア諸国の情勢（特に中華人民共和国における同性愛者の処遇）に注目する記事が少なくなかったことであり、アジア系アメリカ人クィア・アクティビストたちが自身のルーツであるアジア地域と自己の状況を連動するものとして捉えていたという側面である。このことは、アジア系クィアとしてのアイデンティティ形成においてアジアの性的マイノリティの状況への関心が影響を与えていたという可能性であった。

研究分担者の菅は、初年度においては、主に、異人種のインティマシーに対する調査実態、特に家族構成員の人種欄の記載について、1870 年から 1900 年までのセンサス調査票を対象として地域を限定せず、全体像について検討した。また全期間を通じて、従来ナショナルな文脈で検証されてきたアメリカ・センサス史と、出移民研究への関心が希薄となっている日本人移民・移住史をつなぐ作業を行った。その成果の一部を、単著『アメリカ・センサスと「人種」をめぐる境界―個票にみるマイノリティへの調査実態の歴史―』勁草書房、2020 年 1 月にまとめた。

このほか 2020 年には、ワカマツ・コロニー150 周年記念祭において、日系アメリカ人コミュニティへの本研究の成果の一部のアウトリーチを意図した招待講演”Linking U.S. Census History and Japanese American History,” WakamatsuFest150 1869-2019 Celebrating 150 Years of Japanese American Heritage (Placerville, CA, USA)を行った。さらに、韓国アメリカ学会での招待講演で、韓国を始めとする海外のアメリカ研究者への本研究プロジェクトの情報発信を行った。2020 年度には、海外での調査や学会発表が出来なくなったため、個人の記録、書簡などの史料を入手・解析し、センサスをはじめとする諸史料とリンケージし、個人史からみえる環太平洋地域のマイノリティ史・アメリカ史像の検証を進めた。

研究分担者の李は、日本とハワイのコリア系移民の文化とアイデンティティに関する歴史社会学的調査を実施し、次のことを明らかにした。①日本では戦前から戦後の帝国主義体制から国民国家体制への転換の中でコリア系移民が民族意識と国民国家概念を包含するアイデンティティを形成したのに対して、ハワイでは移民当初から民族と国家を基軸にしたアイデンティティが形成された。そして②この帰属意識は、両国の多文化主義政策の中で祖国／出自国とさらに結びつき、コリア系移民は祖国／ルーツとしての朝鮮半島の伝統文化を自らの文化として表象するようになった。しかし③国家の枠組みを基盤とする文化表象やアイデンティティ形成のあり方は、コリア系移民の無国籍／祖国喪失という歴史経験を見落とすものともなってきた。また近年では、④ナショナルな枠組みに包摂される考え方に抵抗する形で、新たなアイデンティティが両地域において発展している。それらは、在日コリアンの間にみられる、複数の国家に跨いだところに自分の帰属意識があるというトランスナショナル・アイデンティティであり、ローカル社会への帰属を強く訴えるハワイのローカル・アイデンティティの台頭である。

以上の環太平洋地域におけるコリア系移民の比較考察から、マイノリティ研究における次の課題が浮き彫りとなった。移民研究やマイノリティ研究は民族と国家をアプリオリに措定することが多かった（①）。その結果、国民国家の枠組みから零れ落ちる現象が見落とされる傾向にあり、国家や民族に関わる現象に焦点が当てられる傾向が強かった（③）。しかし一方で、多文

化主義の下で行われる移民の文化表象については、移民と国家との結びつきについて言及しない傾向もあった（②）。また、新たに台頭するアイデンティティについて、既存のナショナルな枠組みとの力学の中で比較考察していくような歴史的視座が抜け落ちる傾向がある（④）。

研究分担者の佐原は、2018 年 9 月 2 日から 9 日にかけてアメリカ合衆国カリフォルニア州パルアルトにあるフーバー・アーカイブス（スタンフォード大学）で International Rescue Committee に関する史料調査をおこなった。その調査結果をアメリカ史学会年次大会で報告した。人道支援の現場においては、必ずしも難民の就学希望は優先されず、経済的自立の重要性が強調されたことを明らかにした。

また、2019 年 6 月 1 日に開催されたアメリカ学会年次大会の自由論題 A での討論者を務め、6 月 30 日に開催された日本移民学会年次大会のランチタイム・トークで司会を務めた。日本における入管法の改正の問題点を研究者の間で共有することができた。さらに、環太平洋地域における家族の問題に関する国際カンファレンスを 2019 年 7 月に実施した際、コメンテーターを務めた。環太平洋地域における家族形成が戦争の影響を受けてきたことが明らかになった。

さらに 2020 年には研究の成果として、共著の出版 2 冊と論文の出版をおこなった。出版した論文では、難民として入国した人びとに対する強制退去がベトナム系アメリカコミュニティの形成を促す役割を果たしてきたことを明らかにし、環太平洋地域におけるマイノリティ集団の移動においては政府の介入が求められ移動が政治化されてきたことを説明した。

２）勉強会・シンポジウム等の成果

2018 年度には松坂裕晃氏（ミシガン大学大学院・当時）が、アフリカ系アメリカ人のアクティビズムと環太平洋世界に関する講演を行い、アメリカの黒人知識人や活動家にとって、歴史的に日本や中国などの東アジア世界との接触がかれらの抵抗や解放のビジョンを広げ、あるいは深める上で重要な役割を果たしていたことを明らかにする近年のアメリカ史・アメリカ研究における研究成果を紹介した。

同年、遠藤泰生氏（東京大学・当時）および根川幸男氏（国際日本文化研究センター）を招聘して「海をめぐる知識・言説・移動空間」と題するミニシンポジウムを開催した。遠藤氏は 19 世紀アメリカの海軍関係者を含む科学者・知識人において、アメリカや日本といった国民国家の枠組みを超越する空間としての太平洋がどのように認識されていたのか、科学的知を環太平洋世界という枠組みがどのように意味付けていたのかを論じた。根川氏は、日本人移民が北米や南米に多数移住する 19 世紀末から 20 世紀前半の時期に、太平洋・大西洋・インド洋を移動した日本人知識人が海を越える移動の経験を経ていかなる世界観を形成したのかを詳細な史料をもとに明らかにした。

これらの報告は、国境を超える移動の経路としての太平洋という空間が、日本やアメリカ、ブラジルといった一国の枠組みに条件づけられた経験を相対化する契機をもたらすものであったことに、具体的な事例に基づいて光を当てるものであった。

2019 年には、アメリカより Ma Vang（カリフォルニア大学マーセッド校）、Kit Myers（同）、Kim Park Nelson（ミネソタ州立大学ムーアヘッド校）の 3 名の研究者を招聘して国際シンポジウムを開催した。

Vang はモン族の難民経験のポリティクスを論じた。モン族はベトナムおよびラオスにまたがる少数民族であり、米軍・CIA によってベトナム戦争に深く関与した結果、戦後に多数が難民として流出し、その多くがアメリカ合衆国に難民として再定住した。Vang はモン族が難民として国境を超えてタイの難民キャンプ、そしてアメリカへと移動する際に、その経験をタペストリー制作という手芸を通して記憶化する行為に着目し、難民がその経験をいかに語り、その国民国家の枠組みに容易には回収し得ないアイデンティティを構築したのかを明らかにした。

Myers と Nelson は、ともにアジア人の乳幼児をアメリカ人家族が引き取る国際養子縁組(international adoption)の歴史と現状を明らかにした。Nelson は特にアジア系養子の法的地位が、戦後アメリカの移民政策の変容に連動してどのように変化してきたのかを明らかにした。Myers は、国際養子縁組がアメリカ文化の中でどのように表象されたのかを論じ、特にアジア人養子のアジアにおける別離とアメリカでの養子縁組による家族単位への編入のプロセスを救済と幸福として物語ることで、理想としての「アメリカ的家族」像が再生産されていくこと、実際にはアメリカがアジア（朝鮮戦争やベトナム戦争）や国内（奴隷制や先住民の親権剥奪）における家族別離の暴力を構造化させてきたことを不可視化する政治が働いていることを論じた。

これらのシンポジウム報告は、アジア人のアメリカへの移動とアジア系アメリカ人という「マイノリティ」アイデンティティの形成が一様ではなく、その太平洋を横断する移動経路（特に奴隷貿易のような強制ではないが、非自発的な移動）の歴史的に固有の条件が、かれらのアイデン

ティティ形成に刻印を残していった歴史があることを明らかにした。このことは、「アジア系アメリカ人」マイノリティ像を環太平洋的な枠組みから複雑化することの必要性を示していることが判明した。

３）3 年間の共同研究から明らかになった知見

第１に、太平洋という空間が、アジアとアメリカのあいだを分かつ物理的障壁であると同時に、人間とその想像力や世界観が国民国家や地域の枠組みを超えて移動・拡張することを可能にする経路でもあるという点である。

第 2 に、太平洋を通じてアジアとアメリカが接続された環太平洋世界という枠組みの中に、アメリカのマイノリティの歴史、特に本研究プロジェクトの中心的課題であるアジア系アメリカ人の歴史的経験を位置付けることの重要性が明らかになったという点を挙げることができる。

アジア人が太平洋を移動することを経てアメリカのマイノリティとなる過程は、太平洋世界の構造に条件づけられていた。アメリカにおける初期の日本人移動者は 19 世紀後半の国勢調査（センサス）の原票にその記録が残されているが、当時のセンサスは調査員によってその人種的属性が観察され、記録されていた。そのため、日本出身者はアメリカの地でセンサスの調査対象となった時、当時のアメリカ社会の人種カテゴリー化のまなざしによって客体化され、その人種的属性が付与される経験を経たことになる。

日本によって植民地化されていく朝鮮半島出身者がハワイへと移住し、コミュニティを形成し、特に女性が担う舞踊に象徴される文化を形成・継承していく時、コリアン系ハワイ住民の人種エスニック・アイデンティティの形成は、アメリカおよび日本という帝国によって環太平洋世界を分割する複数帝国による秩序という文脈におけるプロセスであった。

また、韓国人児童のアメリカでの国際養子縁組や、インドシナ難民が太平洋を超えてアメリカで再定住する過程は、20 世紀前半までの公式の領土的支配としての植民地分割に基づいた帝国秩序とは異なる、第二次大戦期以降のアメリカによる軍事的なネットワーク型の帝国的秩序の焦点としての朝鮮半島やインドシナ半島における、アメリカの反共主義的介入（朝鮮戦争、ベトナム戦争）に巻き込まれた人びとの非自発的移動であった。アメリカが関与したアジアの内戦が生み出した非自発的人口移動は、アメリカ国内に新しいアジア系マイノリティ人口を形成したが、その経路ゆえに、他のアジア系アメリカ人とは異なる歴史的経験に基づいたマイノリティ・アイデンティティを構築した。

第 3 に、アメリカ合衆国内におけるアジア系マイノリティのアイデンティティ形成プロセスにおいても、環太平洋世界という文脈は影響を及ぼしてきたという点である。これは特に、アジア系アメリカ人ゲイ・レズビアンないしクィア・アクティビズムのなかで、その集合的アイデンティティがいかに形成されてきたかという過程に表れている。白人と異なる「アジア系」人種に属するとされ、かつ性的にクィアであるというアクティビストたちは、組織化して交流し、刊行物を通じて議論を行い、そうした実践を通じてエスニックな相違や歴史的経路の違いを超えた「アジア系クィア」としてのアイデンティティを獲得していった。その過程は同時に、中華人民共和国をはじめとしたアジア諸国の性的マイノリティの地位に対する「アジア系」としての関心を喚起し、アジアの状況を語り関心を寄せることを通じて「アジア系」かつ「アメリカ人」の「クィア」としてのアイデンティティを強化していった可能性が指摘できる。

以上のように、本研究プロジェクトは、アメリカのマイノリティ、特にアジア系アメリカ人の歴史を検討する際に、かれらをアメリカとアジアに接続する環太平洋世界の構造という文脈を同時に考察することが、アジア系マイノリティ史をより立体的に理解する手がかりを得る上で不可欠であることを明らかにすることができたと言える。その際、環太平洋世界を帝国秩序および帝国間関係の秩序の重層的な構造として把握すること、その構造が 19 世紀後半から現代にかけて大きな変容を遂げており、その変容がアジア系マイノリティの存在のあり方に刻印してきたことも見落としてはならない点であると言える。

以上の知見は、さらなる具体的な事例によってより広く深い検討を進めていくことを必要としている。これは本プロジェクトに参加した研究者の今後の課題と言えるだろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 兼子　歩	４．巻 42
２．論文標題 インターセクショナリティの時代？：「女性のワシントン大行進」にみるジェンダーと人種	５．発行年 2019年
３．雑誌名 アメリカ史研究	６．最初と最後の頁 130-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 兼子　歩	４．巻 84
２．論文標題 オリンピック、ジェンダー、セクシュアリティ	５．発行年 2019年
３．雑誌名 明治大学人文科学研究所紀要	６．最初と最後の頁 20-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 李　里花	４．巻 28
２．論文標題 Stateless Identity of Korean Diaspora: The Second Generations in prewar Hawai’i and postwar Japan	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Japanese Journal of Policy and Culture	６．最初と最後の頁 55-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 兼子　歩	４．巻 908
２．論文標題 トランプの時代の新しい女性運動	５．発行年 2018年
３．雑誌名 世界	６．最初と最後の頁 176-183
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 兼子　歩	4．巻 917
2．論文標題 アメリカ政治を変える黒人女性たち	5．発行年 2019年
3．雑誌名 世界	6．最初と最後の頁 98-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐原　彩子	4．巻 30
2．論文標題 「人道」から「セキュリティ」へ：対テロ戦争時代の難民排斥	5．発行年 2018年
3．雑誌名 立命館言語文化研究	6．最初と最後の頁 39-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計15件（うち招待講演　11件／うち国際学会　8件）

1．発表者名 兼子　歩
2．発表標題 アメリカ研究、ジェンダー史
3．学会等名 明治大学ジェンダーセンター設立10周年記念シンポジウム「ジェンダー研究の新展開：この10年と今後」（招待講演）
4．発表年 2019年

1．発表者名 菅　美弥
2．発表標題 Linking Historical U.S. Census Data to Early Japanese Transpacific Migration History: 1860-1870
3．学会等名 The 54th American Studies Association of Korea International Conference, “America, Nation of Great Divide and Tolerance,” Seoul, South Korea（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 菅　美弥
２．発表標題 Linking U.S. Census History and Japanese American History
３．学会等名 International Symposium “WakamatsuFest150 1869-2019 Celebrating 150 Years of Japanese American Heritage” Placerville, CA, USA（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 李　里花
２．発表標題 Portrayal of Korean dance in Japan: Changes in the Paradigm
３．学会等名 韓国チャンウォン大学社会科学研究所地域未来リンクセンター特別セミナー"Memory and Commemoration of Korean immigrants in the US and their relationship with ethnic 'others'"（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 李　里花
２．発表標題 Where do we belong?: "Stateless" Koreans in prewar Hawai’i
３．学会等名 韓国チャンウォン大学社会科学研究所地域未来リンクセンター特別セミナー"Memory and Commemoration of Korean immigrants in the US and their relationship with ethnic 'others'"（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 李　里花
２．発表標題 Korean dance in Japan: Its history, re-invention, and consumption
３．学会等名 The 11th Biennial Korean Studies Association of Australia Conference, University of Western Australia（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 李　里花
２．発表標題 Korean dance in Representation of Korean dance in Japan and Hawai'i in the postwar years: Changes on "who we are" and "who they are"
３．学会等名 Asia Pacific Dance Festival Conference, University of Hawai'i, USA（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 佐原　彩子
２．発表標題 Criminalization of Foreign Bodies in Japan
３．学会等名 The Migration Conference, University of Bari, Italy.（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 佐原　彩子
２．発表標題 日本におけるインドシナ難民研究の射程
３．学会等名 上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科シンポジウム「冷戦人道主義の逆説」、上智大学（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 兼子　歩
２．発表標題 トランプの時代におけるジェンダーと人種の交錯
３．学会等名 日本アメリカ学会　年次大会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 兼子　歩
２．発表標題 ひとりのアメリカ研究者から見た『男らしさの歴史』
３．学会等名 ジェンダー史学会　年次大会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 菅（七戸）美弥
２．発表標題 Self-image through the mirror of America: How Young Students see U.S. Politics and issues of immigration and minorities
３．学会等名 "After the Midterm Elections - US Politics/Society and Japan," Temple University, Japan Campus（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 李　里花
２．発表標題 Ethno-culturalism or Ethno-nationalism?: Comparing Korean dance in Hawai'i and Japan
３．学会等名 International Symposium on “Zainichi Koreans in the 21st Century," The University of Auckland（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 李　里花
２．発表標題 Becoming a ‘Korean’ Dancer in Postwar Hawai‘i: Halla Pai Huhm and Her Transpacific Routes
３．学会等名 日本アメリカ学会　年次大会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 佐原　彩子
２．発表標題 共感による難民受け入れの限界：国際救済委員会（IRC）の活動を中心に
３．学会等名 日本アメリカ史学会　年次大会（招待講演）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計7件

１．著者名 菅　美弥	４．発行年 2020年
２．出版社 勁草書房	５．総ページ数 608
３．書名 アメリカ・センサスと「人種」をめぐる境界：個票にみるマイノリティへの調査実態の歴史	

１．著者名 菅　美弥	４．発行年 2019年
２．出版社 彩流社	５．総ページ数 45
３．書名 遥かなる「ワカマツ・コロニー」：トランスパシフィックな移動と記憶の形成	

１．著者名 佐原　彩子	４．発行年 2019年
２．出版社 名古屋大学出版会	５．総ページ数 23
３．書名 引揚・追放・残留：戦後国際民族移動の比較研究	

１．著者名 兼子　歩	４．発行年 2019年
２．出版社 Palgrave Macmillan	５．総ページ数 111-140
３．書名 Transpacific Correspondence: Dispatches from Japan's Black Studies	

１．著者名 菅（七戸）美弥	４．発行年 2019年
２．出版社 Sairyusha	５．総ページ数 133-165
３．書名 Japaneseness across the Pacific and Beyond	

１．著者名 李　里花	４．発行年 2019年
２．出版社 韓国学中央研究院出版部（韓国）	５．総ページ数 119-146
３．書名 近代アメリカ地域における韓国女性の移住と留学に関する研究（韓国語）	

１．著者名 佐原　彩子	４．発行年 2018年
２．出版社 合同出版	５．総ページ数 32-35
３．書名 世界の難民をたすける30の方法	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	菅　美弥 (Shichinohe-Suga Miya) (50376844)	東京学芸大学・教育学部・教授 (12604)	
研究分担者	李　里花 (Lee Rika) (50468956)	中央大学・総合政策学部・准教授 (32641)	
研究分担者	佐原　彩子 (Sahara Ayako) (70708528)	共立女子大学・国際学部・准教授（移行） (32608)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
Critical Ethnic/Race Studies in the Transpacific World	2019年～2019年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関